

アメリカ草枕

大岡 信

岩波書店

アメリカ草枕

大岡 信

岩波書店

アメリカ草枕

一九七九年一〇月一八日 第一刷発行 ©

定価一四〇〇円

著者 大岡 信おおか しのぶ

発行者 緑川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
番地 株式会社 岩波書店

電話 〇三・六三・四二二
振替 東京六・六三・四〇

印刷・精興社 製本・松本製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

一	プロローグ……………	三
	——旅のはじまり……………	
二	一つの大洋 一つの茶碗……………	一三
	——サンタ・モニカとロサンゼルス……………	
三	一脚の椅子を砂漠で見た……………	六五
	——西部をめぐる……………	
四	石器のみやげと家族の集い……………	一〇五
	——ユタ州の小さな町と大きな都市……………	
五	芸術家たちと美術館……………	一三九
	——ニューヨーク、ケンブリッジ、ボストン……………	
六	伝統は生きのびうるか……………	一八五
	——ニューヨーク、フィラデルフィア……………	

七	ミシガン湖のほとりにて	三九
---	-------------	----

——シカゴ

八	日本語の沈黙と袈裟の詩人	三五七
---	--------------	-----

——サンタ・モニカ、サンフランシスコ

九	エピソード	三〇一
---	-------	-----

——幸運な旅行者

	あとがき	三三
--	------	----

カバー写真(デッド・ホース・ポイント
の展望台より)及び中扉カットは筆者。

アメリカ草枕

一 プ ロ ロ ー グ

— 旅のはじまり



ロサンゼルス空港に降りたって空をふと見あげたとき、一瞬くらっとした。九月も末という季節にしては、これは何という暑さだろう。ここを起点に、アリゾナ、ユタの山岳地帯をまわってニューヨーク、ボストン、シカゴなどに行くつもりの旅だったから、私は先行きの寒さを考えて少し厚手のジーンズを着てきたのだが、一步アメリカ大陸に足をおろしてみれば、真夏というもおろかな四十度を越す暑さ。午前十時すぎのカリフォルニアの青空は、早くも白い輝きを発するようになまかにうち震えていた。

アメリカへ行ってみませんか、という誘いを受けたのは一年近く前のことだった。東京の国際文化会館企画部長加藤幹雄氏からある日会いたいという電話がかかった。

ニューヨークのジャバン・ソサエティー（日本協会）が、その事業の一つである知的交流プログラム一九七八年度の計画として、私をアメリカに招く意向をもっており、同協会の姉妹団体で日本における窓口役をもつとめている国際文化会館を通じて返事を求めてきたということだった。別途に政治学者の京極純一東大教授も招かれているという。もしアメリカに行ける場合は、あち

1 プロローグ

らとしては七八年の秋が好都合だということなんですが、と加藤氏は言った。

知的交流プログラムという言葉をきいて、私は少々ひるんだ。学問研究にかかわることだと、私にはその資格はあまりなさそうだと思ったからである。

「いえ。あちらの理事会は、来年度は詩人を招きたいということで大岡さんを指名してきたんです。最低一ヵ月以上は滞在して、アメリカ国内行きたいところはどこでも、自由に行ってアメリカを見てもらいたいというのです。ただし、ニューヨークのジャパン・ソサエティーで一回講演を——日本語でもいいのです——していただきたいのですが、それ以外の義務はありません。もっとも、滞在中、大学その他での内輪の集まりに招かれたりすることもあると思います。そんな時いろいろあちらの人たちと話し合っ下さると思います」

なんと気前のいい招待だろう。しかし、実際行ってみると、すべて加藤氏の言った通りだった。私は行きたいところへ行き、見たいものを見、会いたい友人たち、また未知の人々に初めて会った。アメリカの自然も都市も建築物も道路も美術館も、私に多くのことを知らせ、感じさせてくれたが、何といっても最も印象的だったのは、そこで暮らしている人間そのものだった。あ、これはヨーロッパではあまり感じたことがない親近感だな、と感じさせられるような出会いがしばしばあった。

旅の終りに近い一日、サンフランシスコ市内にある禅センターで、数年前に得度して禅僧になった詩人フィリップ・ウェイレンと話したが、その時彼の口から何度か発せられた言葉に、「バシフィック・ペイスン」という語があった。太平洋盆地とでも訳したらいいだろうか。つまり、太平洋を中心にして考えれば、アメリカ西海岸も日本も、アラスカもアリゾナも、ポリネシアもミクロネシアも、朝鮮、中国、東南アジアも、みな共通の一大盆地の周縁を形づくりつつ互いにつながっている親族同士ではないか、母なる「バシフィック・ペイスン」を中心にして、アメリカも日本も共通の文化圏に属していると言ったって少しもおかしくないじゃないか、というのが、この語を発した詩人の信念であるらしく思われた。私は頭を丸め袈裟をつけて静かに話すウェイレンと対座しているうちに、時々、日本人の禅僧と話しているような錯覚におちいった。彼の書く詩はむしろ荒々しい饒舌体である場合が多いのだが、彼の立居振舞いは静かだった。たとえばこういう人に出会うというのが、私に用意されていた「アメリカ」というものだったのだなど、旅を終えてから私はしばしば思ったのである。

しかし、出かけてみるまでは一切は茫漠としていた。第一、ジャパン・ソサエティーという団体についても、名前は以前から知っていたけれど中味はほとんど知らないという状態だった。加藤氏からもらったパンフレット「ジャパン・ソサエティー」によって、私ははじめてこの協会の創

立が古く一九〇七年（明治四十年）にさかのぼるという事実を知った。それによると、ジャパン・ソサエティーは当初他の都市の類似団体の協力を得ながら、日本の美術と文化をアメリカ人に伝える役割を果たそうとする団体だった。一九一三年、ニューヨーク州法にもとづく公益法人となったのち、第二次大戦中一旦閉鎖されたが、一九四八年再開、文化、美術、教育の紹介を中心にふたたび活動をはじめた。組織としては個人および法人単位の会員から成る非営利・非政治団体であり、民間レベルで政治、経済、文化、教育などの広い分野の自由闊達な交流を推進し、相互理解をはかろうとするのがその目的だとある。

一九七一年、会長のジョン・D・ロックフェラー三世から寄贈された敷地に劇場、図書館、画廊その他をもつ協会専用ビルであるジャパン・ハウスが建てられ、組織や活動が拡充された。そのロックフェラー三世が、私の渡米する少し前に、自動車事故で不慮の死に見舞われたことは、日本の新聞にも報じられた。

知的交流プログラムというのは、この協会の多様な活動の一環をなす研究援助活動のひとつであって、過去二十年間に日米四十三人の知識人が一―二ヵ月相手国に滞在し、講演会、懇談会、個人的交歓を通して民間大使としての役割りを果たし、高く評価されている、と同パンフレットにあり、近年訪米した文筆家としては梅棹忠夫、遠藤周作氏の名があげられていた。

知的交流委員会の議長であるジェームズ・モーレー・コロンビア大学教授からの招請状が送られてきて、九月下旬から一カ月間アメリカへ行くことが決まった。過去のヨーロッパや中国への旅には妻と一度も同行しなかったので、今度は一緒に行くつもりだった。折悪しく支障が生じて彼女は出かけられなくなったが、旅を始めるとまもなく、私は「ああ、ニューヨークを連れてこなくてよかったぜ」と胸をなでおろすような出来事に、西部の砂漠のまっただ中で出会うことになる。夏に入ったころ、日程のこまかな打合わせのためにニューヨークからジャパン・ソサエティー文化広報部ディレクターの川島瑠璃さんがやってきた。折から、日本各地で日本人の生活に関するドキュメンタリー・フィルムを撮るため滞日中のプリンストン大学教授ジョン・ネイサン氏も、奥さんの画家小田まゆみさんと一緒に来てくれて、

「大岡さん、ニューヨークへまっすぐ行くつもりですか」

「いえ、ロサンゼルス近くのサンタ・モニカに友人の画家サム・フランシスがいますから、最初そこへ行くつもりです。それからあと、西部の砂漠地帯へ行きたいんですよ」

「あ、それ、ぜったいいいです。東京からニューヨークへ直行したってつまらないものね。最初にアメリカのものすごい広さを見てください。そりゃあもう、いいですよ」

アメリカン・フットボールの選手といっても通るくらいこの堂々たる偉丈夫は、ひとしきり

1 プロローグ

西部の砂漠のすばらしさ、空間の雄大さをたたえた。三島由紀夫の評伝の作者として、また、日本現代文学の英訳者としてつとに知られるこの人は、私の会ったかぎりのアメリカ人のうち、たぶん最も闊達な日本語の語り手だと思われたが、映画作りに熱中しており、どうやら大学教師から映画作家に転じたがっているように見えた。勝新太郎と親友なのだとジョンさんは言った。

出かける前に一応草稿ぐらいは、と思っていた講演の準備もまるでできないうちに、日はたちまち過ぎ去り、出発の日があつという間に近づいてきた。

銀行にドルを買いに行つて、備えつけの書類に書きこむだけでいくらかでもドルが買えることを知って驚かされた。パスポートの提示その他、自分がたしかに外国へ行こうとしている者であることを証明するどんな書類も、ドルを買うのには必要じゃないというわけだった。なるほど、日本にはドルがだぶついているんだ、ということを実感をもって教えられた。私が買いに行った九月の二十日過ぎのころは、まだ円高ドル安騒ぎが連日新聞紙をにぎわしていたころだったが、かつてあれほど得難かったドルが、こんなに簡単に、ほとんど無制限に買うことができるようになるということ、私はかつて想像したこともなかった。交換レートの変化的な変化が、物や労働力の交換価値を一瞬一瞬揺さぶり、不安定なものにしてしまうということの中には、物や労働力に対する侮辱があつて、それが経済というものと教えられても、私の単純な頭と胸は簡単にそ

れを呑みこむことができない。

九月二十五日 月曜日 薄曇のち晴

この日午後五時半、私は見送り人や見学者のいない空港から、日航機でアメリカに向かった。首相その他の政府高官は、外国に行くとき、この空港を使わない。羽田から出発し、羽田に帰ってくる。外国の賓客もしばしば羽田に着き、羽田から発つ。どういふわけでそういうことになるのか、別に説明はされない。あまりいい気持のものじゃない。

ユタ州の山中のホテルに泊ったとき、ホテルの土産物店の女主人に、「ナリータ」は近ごろどうなのか、今でも戦争みたいかとたずねられたことを思い出す。また、日本に住んだことのあるボストンのさる女性は、今度日本に行くときは、あの空港に降りたくないわ、ときつい表情で言った。彼女は空港が常時強力な警察力によって守られていることを知っていて、そう言ったのである。

ロサンゼルスまで九時間。私は飛行機の中で、ニューヨークでやる講演のメモぐらいは作っておかねばと思っていた。川島さんから、講演は「現代日本の文化——伝統は生きのびうるか？」という題目ではいかが、という問い合わせがあり、私はそれで結構です、という返事を出してあ

1 プロローグ

った。当初は詩の問題に焦点をしばった形で考えていたのだが、川島さんの意見は、聴衆の中には日本の詩歌についての予備知識のない人もいると思うので、もう少し話題を一般的なものにしてもらえないか、ということだった。私にしても、日本の詩歌の問題を初めて会う外国人たちにもうまく説明できる自信はなかったから、題目の変更に異存はなかった。しかし、ごうごうとひびくジェット機のエンジンを聞きながら日本の伝統の前途を憂慮してみても仕方がなかった。アメリカに着いてから講演の日まで、二週間以上あるはずだから、その間に見聞したものを材料として織りこみながら話をまとめよう、と思い決めて、あとは雑誌を繰ったり、二、三日前から出発までの間に片づけてきたことの備忘録を作ったりしながら、ロサンゼルスまでの時間をつぶした。

▽平凡社『鬼と姫君物語』(御伽草子)、あとがきを残して全部終る。

▽『ユリイカ』特別号「現代詩の実験」に二篇送る。

▽新潮社『日本詩歌紀行』の装幀の件、昨夜、編集の徳田義昭さん来宅、打合わせる。

▽書肆山田、新詩集『春 少女に』の原稿、昨日来宅の山田、大泉両氏に渡す。装幀は中西夏之さんに電話、依頼した。

▽青土社、断章集『逢花抄』のゲラ、一昨夜編集の高橋順子さんに渡す。装幀はサム・フランシスの“*One Ocean One Cup*”にする。サムに許可を求める。忘れないこと。

